

初夏の陽気となり、新緑の青葉が目眩しい季節となりました。冷暖房を必要としない過ごしやすい季節は短い。大いに楽しみましょう。

安倍首相は29日午後（日本時間30日未明）、歴史と伝統ある米議会で、日本の首相として史上初めて上下両院合同会議で演説をした。希望の同盟と日米同盟を自画自賛した。両首脳は、再改定した日米防衛協力の指針（ガイドライン）に基づいて抑止力を強化する方針を表明した。自衛隊と米軍の協力を拡大する（ガイドライン）を「歴史的な合意だ」と評価し、日米が力をあわせることでアジア太平洋、インド洋にかけての地域で、中国の海洋進出を念頭に「力による現状変更を認めない」との立場を鮮明にし、平和と安定を確かなものにするとして、新指針の法的な裏付けとなる安全保障法制の関連法案を夏までに成立させたいとの考えを表明した。国際協調主義に基づく、積極的平和主義という旗のもと米国と共に立ち向かうとも言った。この演説はアメリカ議会、アメリカにとっては素晴らしく、よいしょが過ぎる持ち上げ過ぎの演説と言えましょう。日米同盟は最も大事な二国間関係であります。同盟というのは対等な立場で意見を交換し、お互いが納得して結論を出し、協力していくのが本来の姿です。「アメリカがそう言うのだから仕方がない」というのでは、対等な同盟ではなく単なる従属関係でしかありません。アメリカの言いなりになるということについては、安倍首相も、本当は腹の中でそれほど積極的ではないと思われれます。しかし、日本が軍事的に憲法に縛られず、世界に国威を発揚できるようにしたいという自らの信条を実現できるのなら、アメリカの圧力でも使おうとの魂胆でしょう。昨年の集団的自衛権の行使容認における閣議決定が先行したのと同じ手法で、今回はアメリカ議会での演説を先行させて既成事実を積み重ねて国会審議を有利にしようとの目論見でしょうか。両首脳は米軍普天間飛行場の同県名護市辺野古への移設を着実に進めることも確認したとあり、沖縄の民意はどうなるのか心配である。このように安保法制、沖縄基地問題など国民の理解を後回しにして同盟強化を推進する政治姿勢は問題が大きい。1党多弱、政高党低で首相に物が言えない状態になっている現状ではいたしかたのないことなのでしょう。今回の日米同盟強化の政策が日本にとって吉と出るか、凶と出るか？戦後70年の大きな分岐点であることに間違いはない。後顧の憂いがなきように国会での慎重な議論を期待したい。